

第9講 産業化・都市化と近代家族

田中重人 (東北大学文学部教授)

[テーマ] 近代家族

1 「近代家族」とは

1.1 家族の機能縮小

近代以前の社会において家族が果たしてきた主要な社会的機能 (social function) としてはつぎのようなものがある。

- 家業の経営 ▼
- 扶養と safety net ▼
- 生活の協同 (居住・家計・家事)
- 生殖 (reproduction)
- 子供の教育 ▼ と社会化 (socialization)
- 親密な人間関係

近代化とともに、家族の機能は少なくなってきた (▼印のものが縮小)。この機能縮小の過程は、日本社会では、20 世紀はじめごろから、都市部のサラリーマン層で進展した。日本社会全体にひろまるのは高度経済成長期 (1970 年代ごろまでにほぼいきたる)。

1.2 近代家族と家族問題

近代家族は、近代化に適応してできた家族制度である (山田 1994)。

- 産業化した社会のなかで労働力の再生産 (reproduction) を担う集団
- 初期段階の子供の社会化
- 家族を単位とした生活保障システム

他方、この制度にはさまざまな問題もある。「家族問題」とされる現象のほとんどは、近代家族の特徴に関係している

- 市民社会の原理 (自由と平等) との齟齬: 特に性別役割分業と男女平等の関係 → 女性差別撤廃条約、男女共同参画社会基本法
- 情緒的親密さと暴力のコントロール: ドメスティック・バイオレンスと虐待の問題
- 人口の再生産: 未婚化と少子化

2 村落と都市

2.1 近代化・都市化と二重構造

近代化は社会全体で一律に進むわけではなく、地域によって進行の度合いに大きな差が出てくる。都市では早くから近代化が進行するのに対して、村落ではかなり遅れて近代化が進行する。

ある社会の中に前近代的な部分と近代的な部分が並存している状態のことを、一般に「二重構造」(dual system) という。都市が近代的な産業の成長を遂げるためには、村落から供給される原料や労働力を必要とする。

→ 村落から都市へ労働者が流れ込む → 「人口の都市化」

やがて近代化は都市以外にも波及し、村落の人々の間にも都市的な生活様式が浸透するようになる。

→ 村落における「生活の都市化」

この状態がさらに進行すると、村落の生活も都市の生活と似たものになってくる。

2.2 都市的生活様式 (urbanism)

- 家族の社会的意義の減少
- 自発的結社
- 産業・教育・娯楽の専門機関
- 職住分離
- 異質性・流動性の高さ
- 匿名性
- プライバシーの尊重と儀礼的無関心

近隣の居住者による共同体 (local community) も存続するが、その機能は限定的。

2.3 村落 (rural community)

小規模な村における共同体的な生活様式

- 相互の面識
- 流動性の低さ
- 村落共同体が生活のほとんど全ての側面を包括する

3 宿題

「福祉国家」(welfare state) とはどのようなものか。また、福祉国家ではない国家としてはどのような例が考えられるか。

文献

山田 昌弘 (1994) 『近代家族のゆくえ』新曜社。